

人 間

柏原信行

お話のテーマを「人間」ということにさせていただきましたが、人間といえば、人間とは何ぞや、人間とはいかなるものかという問題は、宗教を追求する者、自己を問い詰める者としては、絶対に避けて通れない問題であろうかと思えます。そしてこの問題は恐らくは永遠の問題であろうかと思えます。

人間 しかしここではこの永遠の問題についてはなくて、ちょっと視点を変えて人間というものを考えてみたいと思えます。この問題がなぜ永遠であるのかという問いに対して、恐らく答えはないであろうと思えます。人間とは何かと問われた時に、二本足で立っているといったり、

あるいは毛のない猿であるといったり、いろんな言い方ができるでしょうが、どのような言い方をしても、人間そのものをずばりと言いつけることはできない。

同じような問いには、なぜ自分が生まれてきたのか。なんのために自分は生まれてきたのか、あるいはなぜ自分は生きているのか、なんのために生きているのかということがあります。こういうことは、若い皆さん方は時々思うことがあるでしょうけれども、時には答えが見つからずに、思い詰めて、悩んで命を絶った人も今までにありました。

今考えてみると、人間について、それは何かという問いの仕方自体がおかしいといえますか、当てはまらないのではないかと思えます。例えばここにコップがあります。コップとは何か。材質はガラスで、色は青い色です。分析すれば、目方が何グラム、口径何センチ、高さが何センチといろんなことがいえるでしょうが、これを落として割ってしまったら、コップでも何でもありません。しかしガラスはそのままある。それではガラスのコップというのはどういうものか。なかなか答えは見つからないと思えます。しかしその答えは見つからなくても、これで水は飲むことができます。

あるいは窓とは何か。窓はそちらにもこちらにもありますから「それです」とすぐに答えら

れますが、しかし指をさしているのは、窓ガラスです。窓ガラスが割れてしまっても、やはり窓は窓です。それでは縁にあるのが窓かといえば、あれは窓枠です。ガラスと窓枠の両方があって、それが窓であるというならば、私のおりましたスリランカなどは冬でも全然寒くもなんともないですから、ガラスなんか入れていない。冷房しなくても風通しはよろしいですから、ただあいているだけで、それが窓である。どんな言い方をしても、窓は窓です。

「何か」ということは、突き詰めてもなかなかそれにぴたりする答えが出てこないのです。普段食事をする時に、茶碗を使ってご飯を食べていますが、なぜこれを茶碗というのか。茶碗というけれども、茶を飲まずにご飯を食べるのに使う。しかしそんなことはどうでもよいのであって、茶碗があれば、それにご飯を盛って食べればすむことです。

ほかにいろいろあります。テニスをします。テニスとは何か。テニスはいつ頃から始めて、ルールはこうで、ラケットの規格はこうで、ボールはこうで、ウェアがどうだと百科辞典で調べても、テニスをしたことにはならないし、おもしろくもなんともない。

まだ皆さんには切実な問題ではないでしょうが、やがてお見合いすることもあるでしょう。お見合いとは何か。日本の古くからある習慣ですが、皆さんがいざお見合いをしなければなら

ない時に、百科辞典を調べてお見合いの歴史を調べても、なんの役にも立たない。うまく相手に気に入られるか、あるいはうまく断ってもらうしかありません。

このような話は釈尊のおられた時代にも考えた人がいました。この世界、といっても宇宙ですが、宇宙には限界があるのか、ないのか。今の宇宙科学でも、宇宙というのは小さい固まりで、その中に地球とか太陽とかがあって、その果てはどのようなになっているのかわからない。これは空間的な話ですが、時間的にも、地球がどうして出来たか。地球は太陽のカスみたいなものらしいですが、その太陽も宇宙の中のカスが集まって出来たらしい。その宇宙のカスはどこから来たかというところ、またどこか他所の天体のカスではないかというので、いくら元を辿ってもきりがないだろうと思います。また、地球の将来ですが、天体というのは消えてなくなつて、ブラックホールになるといわれています。ブラックホールが他の天体をどんどん吸い込んで、最後はどうなるのか。私はそのほうの専門ではなくて、畑違いですから、全く見当もつきません。

あるいはまた、自分自身の肉体は死んだ後どうなるかと考えた。ただの水に返るといいうが、それには魂がある。魂と肉体とは同じものなのか。また全然別のものなのか。そんなことは死

んでみないとわからない。あるいはさとりを開いた人は、死んでからはずっと神様のようなかたちで残るのか。これもまたさとりを開いて、死んでみないとわからないのです。今でもわからないのに、大昔の二千五百年くらい前にそういうことを考えた人がいたのです。

この人は、釈尊は偉い、偉いというけれども、こういうことに答えてもらわないことにはどれほど偉いかわからないというので釈尊のところに行きました。そしてこういうことを全部はつきりと説明してくれるなら、本当に釈尊の教え、さとりのための道が値打ちのあるものだとわかるだろうと思ってたずねました。普通、私などがそういう問題をふっかけられれば、「そんなことはわかりませんなあ」と口をにごしてしまいますが、その時に釈尊がどう言われたか。『箭喻経(マールンキャプッタ・スッタ)』に載っている毒矢のたとえという有名なお話です。ご存知の方もあると思いますが、マールンキャという人が釈尊にこういうことをたずねたのです。その時に釈尊は、そんなことはわからないとは言わない。その代わりに説明もされないのでよく自分の意見をはっきり言うために全然別の話を持ち出して何か実例を挙げたりしますが、その時に釈尊が話されたのが毒矢のたとえです。

人 間
例えば毒矢で射られたとする。どこに当たったかはわかりませんが、大急ぎで医者を呼んで、

とにかく早く矢を抜いてもらわないと、毒が塗ってあるので手遅れになって死んでしまうという時に、医者がヤブ医者で、「そうはいっても、まず調べてみないと」と言っているいろいろ調べはじめ。何を調べるか。まず矢を射たのはどんな人か。インドの昔の話ですから、カーストは何に属するか。バラモンか、クシャトリアか、シュドラか、バイシャか。神主の階級か、武士の階級か、商人の階級か、普通一般庶民かということですが、それから奴隷階級ではないか。もうどこかへ逃げてしまっていないかもしれないが、とにかく探し出してきて調べる。次に、苗字と名前を調べないといけない。身長は高いか、低い、それも調べてみないといけない。皮膚の色はどんな色か。白いか、黒いか、黄色いか。インド人といえば一様に黒いと思いがちですが、やはり個人差があって、黒い人もいればあまり黒くない人もいますので、どんな皮膚の色か。それから住んでいるところはどこか。どこの町、どこの村のどういう人か。これだけのことをまずきっちり調べる。

次にはどういう弓を使ったか。大きい弓か、小さい弓か、どういう形の弓かを調べる。それから弦を丁寧調べる。弦は何で出来ているか。昔は動物の腱を伸ばして使っていたらしいのですが、どういう動物の腱か。猿か、鹿か、また別の動物か、そういうことを調べないといけ

ない。

今度はやっと突き刺さった矢にいきまして、矢の軸が何で出来ているか、竹みtainなものか、葎みtainなものか、それは特別に栽培したものか。そういう材質を調べる。矢につけてある羽根も何の鳥の羽か調べる。それからその羽根と矢尻とをきつくしばってあるものが何で出来ているか。これもやはり動物の腱で丈夫に出来ていますから、どういう動物の腱で作ってあるかも調べる。

最後に突き刺さっている矢の矢尻は一体どういう形か。細長く尖っているか、平べったいか、ぎざぎざか。いろんな形があったようですが、それだけ全部調べて、それがはっきりしてから、じゃあ、矢を抜きましようかとなる。

そんなことをしていれば、肝心の矢の刺さった人は、とうの昔に毒が回って死んでしまっている。医者が一々そんなことを調べにかかっていたら、一体なんのための医者かわからない。矢が刺されれば、どんなやつが射たにしろ、矢がどんな種類であるにしろ、早く矢を抜いて、手当てをしないことには命が危ない。

人 釈尊はこの話をくどくどとマールンキヤに話した後、「あんたが宇宙が有限か無限かとか、

死んでからどうなるかといっているのは、これと同じようなことではないですか」と言った。それを聞いてマールンキヤは、なるほど、いつまで考えてもわからないようなことを一生懸命調べても、たとえその答えが見つかったところで、その頃にはもう命はないかもしれない、と納得したということです。

そういうことは、日常の生活にもいえることです。このコップは何で出来ているかというよりは、喉が乾けばコップに水を入れて、ガブガブ飲めばすっとします。お腹が空いている時には、茶碗とは何かということよりも茶碗にご飯を盛って食べればいいのです。お見合いの時には、この時には相手がどういう人か丁寧に調べないといけません、お見合いの席でもう一度名前だとか、住所だとか、身長だとか、そんなことを調べる人はまずいでしょう。またテニスの時にテニスをしている相手はどういう家の人か、何をしている人か、学生さんか、サラリーマンか、身長は何センチか、何という名前か、住所はどこか、あるいは使っているラケットがどういうラケットか、材質はカーボンかグラスファイバーか、ガットは何で出来ているか、今はみんなナイロンですが、昔は羊の腸で出来ていてハイシープとかいっていましたが、そういうものを全部調べても、相手がラケットで打ってきた時にはなんにもならない。すぐに球の

飛んでくるところへ走って行って打ち返さないとテニスにならない。それが普通のテニスというものです。

何ごとにも、知りたい、調べたいという気は起こるものですが、普通、それには何か目的があります。大人になると、考えることだけに集中して本来の目的もわからなくなり、ただ人間とは何かとか、そういうことだけに思い悩むものですが、小さい子どもですと、そんなむずかしいことは考えない。質問する時には、目的がはっきりしています。目的のないことを一々聞いたりほしくない。私は今三色のボールペンを持っていますが、小さい子は「それ何」と聞きます。「これはボールペンや。」「ボールペンで何」と聞きます。「字を書くもんや」といいますと、「なんでそんなにいろいろあるのや。」「これはいろんな色があって、使うのに便利なように出ている。」「ちょっと貸してみて。書けるなあ。なんで、こんなにいろいろな色が必要のや。」こうしてなんとかかんとか聞くのは、必ず欲しいなあと思っただけです。最初は使ってみたいなあ、触ってみたいなあと思っただけ。私たちにも経験があります。子どもの時ですが、学校へ修理に来た大工さんが、ドリルだとかいろいろな道具を持っていると、それに触ったり、木に穴をあけてみたりしたい。最初から「やらせて」といえば怒られるに決まっているから、

「それ何」と聞くのです。「どないすんのん」と言って、うまくいけば「ちょっと、やらせてくれへんか」と、やらせてもらうことを目的に持っている。

あらゆる問いはこれと同じように、最初から目的を持って問うとうまく運ぶものです。例えばテストでも、何を問うているかということを見つけておいて、とにかくその答えを探す。皆さんもレポートを書く時に、何を書いているのかわからないというのが一番困るでしょうが、何と何が聞かれているかということをもっと頭に入れておけば、書くことも決まってきましたし、本などからその箇所だけ探して一生懸命書けばいい。

それで最初にいった人間とは何かという問いですが、「何か」「何か」といっているだけでは、目的も何もわからない。人間とは何かということがわかって、それでどうなんだということになる。肝心なのは、人間とは何かということを考える中で、自分がどのように生きていけばいいか、自分の追求している人間とは本当はどうあるのがいいのか、本当はどういうのが一番理想的な生き方かということを考えることです。ですから先ほどたとえに出した茶碗でも、テニスでも、どのように対処するのが肝心です。茶碗をうっかり裏向きに持てば、ご飯など入るはずがない。茶碗は叩いて音を鳴らしたり、ほかにもいろいろ使えますが、あれはご飯を入

れて食べるものです。テニスは飛んできたボールを打ち返すことです。それぞれ、どういうふうにするかということが一番肝心なのです。

私がこういうことに気がつきましたのは、仏教の本には「何か」という問いかけではなくて、「どうであるか」という書き方がしてあるからなのです。「茶碗とは何か」といわずに、「茶碗とはどういうものか」とか、「どんなふうにするべきか」といった問いの出し方で書いてあり、その答えに「茶碗はご飯を食べる時に使う」とか、「左手で持って」ということが書いてあるのです。書いてあるのは使い方とかそういうことばかりなのです。

それで人間についても、人間とはどういうようにあるものなのか、どういうようにやっているものなのかということが問題になります。ここで肝心なのは、人間といっても、他人にこうあるべきだとか、こうしなさいとかいっているだけではなんにもならないということです。それでは自分に毒矢が刺さっているのに、よその人に「あんたも毒矢を早く抜きなさい」というばかりで、自分の毒矢を放りっぱなしにしているようなものです。人間という場合、自分が人間なのですから、他人のことはともかく、自分の人生がいかにあるべきか、それを追求していくことが必要なのです。

他人のことはどちらでもいいのです。たとえ隣の人に毒矢が刺さっていたとしても、もし自分にも毒矢が刺さっていれば、先にそれを抜かなければならない。相手の毒矢を抜く前に自分に毒が回って死んでしまえば、相手を助けることもできなくなります。とにかく自分のことをまず一生懸命やることです。他人の世話をやくのは二の次です。

社会福祉ということになりますと、他の人を助けることがその活動ですが、仏教というのは、どちらかというところだけを追求める。とくに南方の仏教はそういう理念に基づいています。これは突き詰めて考えると、浄土真宗の場合ですが、まず自分の足元を見ることがです。では自分のことを一生懸命やって、他人はどうでもいいのかということになります。自分という人間について、何かを一生懸命にしていれば、他の人もみんな同じ人間なのです。他人のこともよくわかります。自分のことをないがしろにして他人の世話をやいていると、自分のこともおろそかになります。自分のことを一生懸命追求すれば、他の人のことも自然にわかるようになります。

今私は、同じ人間であるといいましたが、私がスリランカにいる時に、もう一つ、これもやはりおかしいのではないかと気がついたことがあります。同じ人間であるのに、どうして黒人

だとか、外人だとかいって差別するのか。また「いわれのない差別はいけない」といいますが、それならいわれのある差別ならいいのか。いわれがない、根拠がないと思うから、そんな差別はおかしいというのですが、差別している本人ははっきりとした十分な根拠があると思っています。

この間、留学生の弁論大会がありました。その時黒人の先生が「日本人は差別意識が強いようですが、これは本当にいわれのない差別でしょうか」といっていました。色が黒いというだけで、麻薬中毒になっている人間のように思う人がいるらしいのですが、そう思う人は、「色が黒い」ということがはっきりした根拠だと思っています。黒人の中には実際に麻薬中毒の人もいるでしょうが、中毒患者は白人の中にもいることです。社会環境の影響で、少しは黒人のほうに多いかもしれませんが、一人の黒人が麻薬中毒患者であれば黒人全部が中毒患者である、というようなことは絶対にあり得ません。しかし差別して怖がっている人は、怖いという頭しかなくて、いわれのない差別だといわれても、「とにかく黒人は怖い」と言うだけで、話にならない。差別している本人にとっては、十分根拠のある、いわれのある差別だと思っているのです。

話をスリランカに移します。セイロン島です。私はスリランカへ行く前にはインドに行っていました。インドは花の咲き乱れたきれいなところもあるのですが、きたないところは非常にきたない。暑くて疲れているから、少しきたないだけでもそう思えたのでしょう。それに比べてスリランカは、インド洋の真珠といったり、緑の島といったりするものだから、随分きれいなところのような気がしていました。

実際にスリランカの空港に降り立ってみると、このホールに負けないくらいにすっきりしたきれいな空港で、さすがにきれいな国だなあと思いました。着いたのは真夜中でしたが、空港の中は冷房がきいていて、涼しいでした。それが空港を出てバスが走り出すと、外はむうっと暑いし、町の様子はインドと大して変わらない。しかし、暑いといっても京都の暑さに比べるとうんとましです。北緯七度くらいで、日本の北緯三十五度に比べると赤道に近いですから、紫外線はうんと強いような感じがします。

外に出ると直射日光が強くて大変な暑さですが、島国で海が近いですから、木陰に入るといつも海からの涼しい風が吹いています。大きな建物の中は、クーラーなしでもスーツを着ていてなんともないくらいの気候です。気温は京都ですとすぐに三十度を越えますが、向こうでは

高くて三十度です。私がおりましたのはちょっと奥まった盆地のようなところでしたが、珍しく三十四度になったと新聞に出たくらいです。湿度も、湿度計で計ると七、八十パーセントはあるのですが、風が吹いているせいか、むし暑さは感じません。

スリランカには天災というものがありません。日本ですと、静岡の人はこのところ地震で心配なことでしょうが、向こうでは地震など全然知りません。話を聞いていると、地震というのは地面が割れて火が吹き出すのだろうなどと、火山の爆発とごちゃまぜにしているのではないかという感じがしました。

唯一の災害は雨です。私も、雨季は五月頃と十一月頃の二回あって大雨だということは大体知っていました。行った時は一月でしたが、五月になりまして、夜中の三時頃に大きな地響きがあります。これは戦車か何かが通るのかと思って外を見ました。最初は信じられなかったのですが、それが雨だったのです。日本では、雨といえばザーザーという音ですが、向こうでは、その雨が地面に当たって、地鳴りがするというか、地響きがするのです。外で雨に当たると、肩など痛くてしっかり立っていられないくらいです。ちょうどバケツの水をぶちまけたような大変な勢いで、みるみるうちに辺り一面海のようになります。最初は夜中の三時くらいから降り

出していたのが、少しずつ時間が早くなりまして、二時くらいになり、十二時くらいになり、十時、九時となり、そのうちに夕方から降り出すようになり、その雨も、日中降るようになると小降りになって、ようやく日本の夕立くらいの雨になります。何しろ半年分の雨量を降らせるのですから大変な量です。日本では、雪がその雨量に当たるのかもしれないませんが、雨はすぐ海に流れてしまいますから、あとはなんの心配も要らない。その雨で道路が少し傷むのが災害です。

衣食住とはいえば、着るものはTシャツと半ズボンくらいしか要らない。家のほうも、床は漆喰のようなもので、それにワックスをかけてありました。天井なんか隙間だらけです。少々雨が漏っても、雑巾でさっと拭くだけでよい。日本では瓦を一枚ずつしっかりと針金で止めておかないと、台風で飛んだり、雪の深いところでは大雪の時に雪と一緒に流れ落ちてしまったりしますが、スリランカには台風も大雪もなくて、大雨が降るだけです。瓦が大ざっぱに並べてあるだけです。非常に気楽な感じですよ。

食べるものは、インドと同じようなカレーですが、インドに比べてあっさりとしています。インドのカレーはずいぶん油っこくて、ベジタリアンのための野菜カレーでも油をふんだんに

使っていますが、スリランカでは、動物性の脂の代わりにヤシの油を使い、さっぱりと仕上げます。ココナツが沢山とれますので、ココナツの実を削ったものを絞って、だしにします。スリランカのカレーが一番辛いといいますが、どれくらい辛いかといえますと、カレーは手で食べるのですが、指先が辛さで熱くなってくるのです。口の中はもちろん火のようになります。お呼ばれで行きますと、折角出してくれたものを喜んで食べないといけないと思うので食べますけれども、とにかく辛い。しかし、辛いけれどもおいしい。

このようにいろんな点で日本と随分違っています。一口にスリランカ人といいますが、いわゆるスリランカ人というのはインドの北のほうから移民してきた人種で、シンハリ人といわれている人たちです。新聞などではシンハリ族といっていますが、シンハリというのは間違いで、本当はシンハラです。英語で日本人をジャパニーズと同じで、シンハラはシンハリーズです。それを間違っただけ取ってシンハリー族、シンハリー語といっているのです。これでは日本人をジャパニー人といっているようなものです。新聞社にはいろんな人が投書するのですが、このほうが通りがいいということでなかなか改めないらしいのです。スリランカにはそのシンハラ人が七割くらい住んでいます。それからこのシンハラ族は、普通の人間と同じ猿

の子孫ではなくて、ライオンの子孫ということになっています。北インドでお姫さんが散歩に出ている時にライオンに強姦されて出来た子どもの子孫だ、自分らは栄あるライオンの子孫だということになっていますが、もちろんそんなことは伝説です。

そのほかに一割くらいがインドの南のほうから移民で来ていますし、イギリスがインドを植民地にしていた時に、労働者として連れてこられたインド人も一割くらいいます。この移民で来ている一割のインド人と、それより前に移民して来ているシンハラ人との間に、ここ数年民族紛争が起こっているのです。シンハラ人は仏教徒ですが、南インドから来ているのはタミル人でヒンズー教徒です。民族も違えば宗教も違う。言葉もシンハラ語とタミル語というふうに違う。それから習慣も違います。

私が向こうにおりました時にも、実際に衝突がありました。子どもを幼稚園に連れていくと、「騒動が広まっていますので、今日はすぐに帰ってください」と言われました。それでマーケットのほうに行きますと、市場の中の店が焼き討ちに遭っていました。店といってもブロックで造っているもので、日本の家のように丸焼けということもなくて、内部が燃えて、天井の梁が焼け落ちていく程度です。商品は全部外に放り出してあって、食料品店などは、とうがらしの粉

に火がついたものですから、大変な煙たさでした。

この事件は、少し前にシンハラ人の軍隊が、タミル人の女の子に手を出したという噂が広がり、それが原因でした。それまでに、少数派のタミル人が自分たちは人種も宗教も違うのだから、土地を分離して、独立させてほしいというような要求をされていて、前から燻っていたのです。ここでは大昔から、南インドが攻めてきたりして、時々衝突が起こっているのです。外出禁止令も出ていたので、私はあまりふらふら歩いていて軍隊に撃たれてもかなわないと、家の中にこもっていました。後で聞いた話によりますと、よほど恨み骨髄なのか、タミル人を引っ張り出して手足をばらばらに切り離し、それに火をつけて燃やしたとか、あるいは四、五人積み重ねて火をつけて燃やしていたとか、無茶苦茶なことをやったようです。

報道管制が敷かれていたので、私たちは、わからないところはイギリスやアメリカの短波ラジオで知りました。記者がこっそりインドから入って来て調べ、それをアメリカやイギリスに報道していたのです。あるいはスリランカの様子を書いた新聞を送ってもらい、それを読んで知りました。それによると皆一様に、世界中にいろんな仏教徒がいるが、中でもシンハラ人は非常に敬虔な仏教徒のはずである。それなのになぜそんなひどいことをするのか理解しがたい、

と書いていました。そして、これはやはり民族が違うから衝突するのだというように書いています。

地元にした私たちからすると、近所には敬虔な仏教徒が何人もおられました。そういう人が人殺しをしたり、火をつけて回ったりしたわけではなくて、みんな同じように脅えていたのです。ほんの一握りのテロリストのような連中がやっていることなのですが、それを外から見ると、シンハラ人全部というふうに見えるらしいです。そういう言い方をすれば、一部の日本人によってひき起こされた南京大虐殺であっても、日本人は皆人殺しということになりそうですが、この場合もシンハラ人を十把一からげに見ているのです。

個人個人を見ていけば、決してそんな考えは思いつかないものです。戦争になれば、個人個人のことはあまり見ない。戦争映画でも、飛行機が落ちたり、軍艦が沈没したりする場面はよく写るけれども人間のほうはあまり写らない。沢山の兵隊が海に落ちて死ぬ場合も個人個人についてはよくわからない。

同じ戦争映画でも、「ひまわり」は反戦映画で少々趣きが違います。戦場で傷ついた夫は地元の娘に助けられ、情にほだされてそこに居ついてしまう。郷里に残った妻は夫が生きている

かもしれないというので探しに行くが、見つからない。やがてそれぞれが再婚する。何年か経って、夫が生きていることがわかります。二人は本当に愛し合っていたのですが、既に子どもが出来ていて、お互いの暮らしもあり、もう一度昔のようにと思っても、元に戻るわけにはいかない。そこでジレンマに陥るが、結局は泣く泣く別れるという、それだけの話です。それに「ひまわり」という題がついているのは、ひょっとしてお墓に夫の名前があればあきらめもつくと思つて、戦場へ夫を探しに行った。その時地元の人から、お墓はないがここを見てくださいといわれて行ったところがひまわり畑で、死んだ人のところにひまわりを一本ずつ植えたのがこんなになりました、と。そこでひまわりの花が大きく写り、それがだんだん広がって、辺り一面ひまわり畑というところで終わるからでしょう。

ひまわりを一本ずつ植えたということは、戦争の時には辺り一面累々たる死体だったということです。ヨーロッパではひまわりから油をとりますので、そこいら中にひまわり畑があるでしょうし、わざわざ人が戦死したところに一本ずつ植えなくても思いますが、これは映画を作った人が戦争でどれだけの人が死んだか、また死なないまでも、個人的にも戦争のために別れ別れになってつらい思いをして生きていく人がいるということを表現したかったのだろうと

思います。

また同じ戦争映画で、これは小説を映画化したものですが、「西部戦線異状なし」というのがありました。戦争が小康状態で静かな小休止の時ですが、杭の上にきれいな鳥がとまっている。主人公は昔の学生時代のように、手帳を取り出してそれをスケッチしている。非常にのどかなひと時の平和でしたが、その時に「パーン」と音がして、主人公は頭を打たれて死んでしまふ。そのラストシーンは、無線で「西部戦線異状なし」と言う場面です。本人の家族や恋人にとつては、「異状なし」ところか大変なことです。これが戦争でなければ電報を打ったりして大騒動するところですが、戦争となれば、一人死んだくらいでは静かなもので、全く異状なしとなる。ですから、全体を見るか個人を見るかによって、もの見方が全く変わってくるだろうと思います。

スリランカでも、私はタミル人もシンハラ人も知っていますが、個人個人を見ていけば、とくに仲がいいというわけでもないのですが、別段、反感を持っているわけでも反目しているわけでもない。宗教が違ったり、使っている言葉が違ったりしても、言葉は英語で通じますし、殺し合いをしないといけない理由はどこにもない。日本でも、横浜や神戸には華僑の人やイン

ド系の人など沢山住んでいます。そうした人同士、そして日本人とも、けんかせずにみんな普通に暮らしている。とくに仲よくしているわけでもないが、普通の日本人同士と同じように暮らしています。

それがなぜああいうことになるのか。私の向こうでの指導教授は、海外援助、これをエイズといいますが、それが悪いと言っていました。海外援助がなぜ悪いかというと、日本は向こうにかなりのお金を落としますから、企業は急成長する。そこで成金が出来ますが、反面、失業者も沢山出来まして、皆なんとなくおもしろくない。タミル人は元々イギリスの保護もあって、金持ちだったのです。今でも民族の十パーセントにあたる人が国の税金の六十パーセントをまかなっているらしい。スリランカ人でウォール街進出第一位もタミル人のようですし、銀行関係を握っているのも、タミル人が多いそうです。そういうことで、経済的に困っているわけでもない。しかし誰も彼も金持ちではないから、やはりおもしろくない人も出てきます。シンハラ人にもおもしろい人とおもしろくない人がある。おもしろくないやつをやっつけてやれということになって、けんかになるといふことです。

人 一人一人見ていますと、平和な時にはみんな平和な人間ですし、南京大虐殺に関与した日本

人でも、今は普通に暮らしている。スリランカでも、ずっと昔は南インドのほうからお姫さんを迎えたりして、仲よく暮らしていた時もあるのですが、状況が変わるとけんかになる。日本人も戦争中は鬼畜米英といっていたのが、今はアメリカと仲よくしています。その時の気分でものようにも変わるものです。

そのように、自分で「自分が人間の一人として」と思っている、人間というのは状況次第でいくらでもころ変わるものです。戦争になれば人殺しになります。しかし平和な時に、人殺しのままであるというわけでもありません。状況次第で人間はどうにでも変わる。それなら状況に任せておくよりほかしようがないのかということになります。それでは人間としてあまりにも情ない。そこで自分で自分をどのようにコントロールしていくか、いいように向けていくかが問題になります。

昔チャップリンの「モダン・タイムズ」という映画がありました。チャップリンが工員になって、一生懸命やっているが、要領が悪いものだから、首になって、すぐ代わりのがやってくる。工業化がどんどん進みまして、人間は一介の労働者になり、いくらでも交換がきく。その、いくらでも交換がきくというのが映画のいいところだと思いますが、人間というのは本当は

全然交換がきくものではないのです。戦争映画では、爆弾で沢山死んでも、また本土から兵隊を沢山送りこんで、いくらでも交換がきく。しかし同じ戦争で亭主を亡くした嫁さんにしてみれば、代わりの亭主というわけにもいかない。ましてや親子では、親が戦争で死んだからといって、代わりの親をというわけにはいかない。息子の戦死公報が来たからといって、よその息子をどこかから貰うということにはならない。人間は皆同じように手が二本、目が二つあって、なんとなく同じ人間だと思いがちですが、同じ人間などどこにもいないのです。人間はみんな別々なのです。別々だから、それだけ値打ちがあるのです。日本人は黄色人種ですから、黄色い顔をした人を見ると安心しますが、色が黒いと、違うような気がする。本当は全部別々、ばらばらであたりまえなのです。同じ日本人同士でも、同じ人はまずいない。たとえ双子でも全然違います。

間　　そういうことを感じさせてくれるのは恋愛です。皆さん、実感のある方もおありでしょうが、恋愛中の二人を横から見ていると、なぜあんなのがいいんだろう、どこを好きこのんで思っている、本人同士は結構気に入っている。そういう人に「あんな人やめて、こっちのほうにしたらどうか」と言っても、それは変えられんというのが当然の心理でしょう。また、双子な

らどちらでもかまわんということはないでしょう。兄弟も、よく似ているからどっちでもいい、ということにはならないでしょう。

これと同じことは、親と子どもにもいえます。親にきょうだいがいて、おばさんなりおじさんなりが、親とよく似ているから代わりでもいい、というわけにはいかないのです。子どもにとつて親は、かけがえのないものです。

そういうところを親鸞聖人が、あるいは蓮如上人が、「阿弥陀仏が、親が子どもを思うように、目をかけてくれている」と言っています。私も二十歳頃にはさして思いませんでしたが、自分に子どもが来ると、子どもが親のことをどう思うかわからなくても、親のほうは子どもが心配なものです。それと同じように、阿弥陀仏も我々に目をかけてくれているという実感を持たせるために、親鸞聖人や蓮如上人はその例を挙げたりしております。

時間が迫ってきましたので、もう一度最初の人間という問題に戻ります。

人間なんてそこいら中に掃いて捨てるほどいる。人間でないほうが値打ちがあるくらいです。ペットショップで高価な犬や猫をみても、同じものは二匹といない。人間も世界中にいっぱいいて、それを集団ということでみた場合は、どこかで何万人死んでも人口はほとんど変わらない

いし、まして一人や二人死んだところで、世界の情勢は大きく変わるわけでもない。たとえ私
がここで心臓発作で倒れても、光華学園がつぶれるわけでもないし、世の中がどうなるもので
もない。社会党が圧勝しても、それで世の中が変わるわけでもない。しかしもし私が心臓発作
で倒れば、女房、子どもはがっくりするでしょう。

それと同じように、自分というものがどれほど値打ちがあるのか、それを自覚させてくれる
のが宗教の立場だろうと思います。自分本位でよろしいですから、自分をとにかく大事にする
ことが大切です。しかし自分を大事にするという時に、ちょっと方向を間違うと、エゴイスティ
ックになってしまいます。同じ自分本位ですが、自分さえよければいいというようになる。例
えば、自分がよければいいではないかといって、好きなことをする。酒を飲み放題に飲む。小
遣いを全部パチンコに注ぎ込む。そんなことをやっていけば、健康を害することにもなるでしょ
うし、家庭不和で、本人も楽しいわけがない。好き勝手なことをやっていると、自分を滅ぼす
ことになります。家族のためだから酒は慎まないといいけないとか、たばこはよくないからやめ
ようとか思っていると、それが却って健康によいということになり、結果として自分を大事に
することになる。皆さんは酒やたばこをやるわけではないと思いますが、親御さんや友だち、
人

あるいは恋人のことをいつも頭においていれば、それが結局は自分のためということになるのです。これは仏教の菩薩道ということですが、ややこしいことをいうとわけがわからなくなると思いますので、ここでは触れません。ただ、自分のためを思うなら人のためを思え、というのが仏教の教えのようです。

そんなことから、試験中で大変でしょうが、試験で一生懸命頑張るのも、みんな自分のためです。頑張った分、自分が社会に出るから貢献できると思って頑張ってください。自分がいい目をしようと思っていると、自分はどうでもいいわという時には、おかまいなしになりませんが、他人のためだと思っていれば、なかなかいい加減なことができない。そんなわけで、自分という人間を問いつめるのではなくて、どういうように人間をやっていくかということ、明るく楽しい青春にしていただきたいと思います。若輩ですので、あまり宗教講座らしい、有難い話もできませんでしたが、よろしく願います。

——一九八九・七・二五——